# 日蓮大聖人御書全集

## 減劫御書（げんこうごしょ）

新版
1966
〜
1969

# 減劫御書

建治元年（'75）末または同2年（'76）　54歳または55歳

高橋六郎兵衛の縁者

減劫と申すは人の心の内に候。貪・瞋・癡の三毒が次第に強盛になりもてゆくほどに、次第に人のいのちもつづまり、せいもちいさくなりもてまかるなり。

漢土・日本国は、仏法已前には三皇・五帝・三聖等の外経をもって民の心をととのえてよをば治めしほどに、次第に人の心はよきことははかなく、わるきことはかしこくなり

しかば、外経の智あさきゆえに、悪のふかき失をいましめがたし。外経をもって世おさまらざりしゆえに、ようやく仏経をわたして世間をおさめしかば、世おだやかなりき。これはひとえに、仏教のかしこきによって人民の心をくわしくあかせるなり。

当時の外典と申すは、本の外経の心にはあらず。仏法のわたりし時は外経と仏経とあらそいしかども、ようやく外経まけて王と民と用いざりしかば、外経のもの、内経の所従となりて、立ちあうことなくありしほどに、外経の

人々、内経の心をぬきて智慧をまし、外経に入れて候を、おろかなる王は外典のかしこきかとおもう。

また、人の心ようやく善の智慧ははかなく悪の智慧かしこくなりしかば、仏経の中にも小乗経の智慧、世間をおさむるに、代おさまることなし。その時、大乗経をひろめて代をおさめしかば、すこし代おさまりぬ。その後、大乗経の智慧及ばざりしかば、一乗経の智慧をとりいだして代をおさめしかば、すこししばらく代おさまりぬ。

今の代は、外経も小乗経も大乗経も一乗法華経等

も、かなわぬよとなれり。ゆえいかんとなれば、衆生の貪・瞋・癡の心のかしこきこと、大覚世尊の大善にかしこきがごとし。譬えば、犬は鼻のかしこきこと人にすぎたり。また鼻の禽獣をかぐことは、大聖の鼻通にもおとらず。ふくろうがみみのかしこき、とびの眼のかしこき、すずめの舌のかろき、りゅうの身のかしこき、皆かしこき人にもすぐれて候。そのように、末代濁世の心の貪欲・瞋恚・愚癡のかしこさは、いかなる賢人・聖人も治めがたきことなり。

叶世故
しゅじょうとん
じんちこころ賢
たと
いぬはな過
ひと
はなきんじゅう嗅
だいしょうびつう劣
鼻耳
鳶
まなこ
雀
したみ
竜
みな
ひと
まつだいじょくせこころとんよくしんに
勝
そうろう
けんじんしょうにんおさ
ぐち

その故は、貪欲をば、仏、不浄観の薬をもって治し、瞋恚をば慈悲観をもって治し、愚癡をば十二因縁観をもってこそ治し給うに、いまはこの法門をといて、人をおとして、貪欲・瞋恚・愚癡をますなり。

譬えば、火をば水をもってけす。悪をば善をもって打つ。しかるに、かえりて水より出でぬる火をば、水をかくれば、あぶらになりていよいよ大火となるなり。

今、末代悪世に、世間の悪より出世の法門につきて大悪出生せり。これをばしらずして、今の人々善根をすすれ

ば、いよいよ代のほろぶること出来せり。今の代の天台・真言等の諸宗の僧等をやしなうは、外は善根とこそ見ゆれども、内は十悪五逆にもすぎたる大悪なり。

しかれば、代のおさまらんことは、大覚世尊の智慧のごとくなる智人世に有って、仙予国王のごとくなる賢王とよりあいて、一向に善根をとどめ、大悪をもって、八宗の智人とおもうものを、あるいはせめ、あるいはながし、あるいはせをとどめ、あるいは頭をはねてこそ、代はすこしおさまるべきにて候え。

法華経の第一の巻の「諸法実相」乃至「ただ仏と仏とのみ、いまし能く究尽したまえり」ととかれて候はこれなり。「本末究竟」と申すは、「本」とは悪のね善の根、「末」と申すは悪のおわり善の終わりぞかし。善悪の根本枝葉をさとり極めたるを仏とは申すなり。

天台云わく「夫れ、一心に十法界を具す」等云々。章安云わく「仏これをもって大事となす。何ぞ解し易きことを得べけんや」。妙楽云わく「乃ちこれ終窮究竟の極説なり」等云々。法華経に云わく「皆実相と相違背せず」等云々。天台

これを承けて云わく「一切世間の治生産業は、皆実相と相違背せず」等云々。

智者とは、世間の法より外に仏法を行わず。世間の治世の法を能く能く心えて候を、智者とは申すなり。

殷の代の濁って民のわずらいしを、太公望出世して殷の紂が頸を切って民のなげきをやめ、二世王が民の口ににがかりし、張良出でて代をおさめ民の口をあまくせし、これらは、仏法已前なれども、教主釈尊の御使いとして民をたすけしなり。外経の人々はしらざりしかども、彼らの

人々の智慧は、内心には仏法の智慧をさしはさみたりしなり。

今の代には、正嘉の大地震、文永の大せいせいの時、智慧かしこき国主あらましかば、日蓮をば用いつべかりしなり。それこそなからめ、文永九年のどしうち、十一年の蒙古のせめの時は、周の文王の太公望をむかえしがごとく、殷の高丁王の傅説を七里より請ぜしがごとくすべかりしぞかし。日月は生盲の財にあらず。賢人をば愚王のにくむとは、これなり。しげきゆえにしるさず。法華経の御心と申す

は、これていのことにて候。外のこととおぼすべからず。大悪は大善の来るべき瑞相なり。一閻浮提うちみだすならば、「閻浮提内、広令流布（閻浮提の内に、広く流布せしむ）」は、よも疑い候わじ。

この大進阿闍梨を故六郎入道殿の御はかへつかわし候。むかしこの法門を聞いて候人々には、関東の内ならば、我とゆきてそのはかに自我偈よみ候わんと存じて候。しかれども、当時のありさまは、日蓮かしこへゆくならば、その日に一国にきこえ、またかまくらまでもさわぎ

候(そうら)わんか。心(こころ)ざしある人(ひと)なりとも、ゆき行たらんところの人(ひと)、人目(ひとめ)をおそれぬべし。いままでとぶらい訪候(そうら)わねば、聖霊(しょうりょう)いかにこいしく恋おわすらんとおもえば、あるようもありな有様(ありさま)ん。そのほど、まず弟子(でし)をつかわして遣、御はかに墓(おんはか)自我偈(じがげ)をよ読(よむ)ませまいらせしなり。その由(よし)、御心(おんこころ)え得候(えそうら)え。恐々謹言(きょうきょうきんげん)。